枠を越えて

見守り、支える仕組みを伝授！
ケアマネは鎧を脱いで地域に飛び出そう

おおた高齢者見守りネットワーク、愛称みま～もは、考え練られたネットワークの仕組みにより、お仕着せでない、さりげない見守りによる安心が実現しています。さりげない見守りを実現した背景には、13年間に渡る澤登さんたちのぶれない意思がありました。

取材協力▶澤登 久雄さん ◉ 社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長、介護支援専門員

さわのぼり ひさお
2008年4月、地域の医療・介護事業者に呼びかけ、「おおた高齢者見守りネットワーク」（愛称：みま～も）を発足。現在、協賛事業所・企業・団体は70を超える。2009年8月、当団体にて「SOSみま～もキーホルダー登録システム」を生み出す。このシステムについては、全国の自治体で導入が進んでいる。著書に『地域包括ケアに欠かせない 多彩な資源が織りなす地域ネットワークづくり－高齢者見守りネットワーク「みま～も」のキセキー』がある。

みま～もサポーターの飯田静慧さん（右）とみま～も発起人の澤登久雄さん（左）。
お面はマスコットキャラクターみま～もちゃん（左）とみま～もくん（右）

個別支援の限界に直面したことが発足のきっかけ

今から13年前、地域包括支援センター入新井のセンター長をしているときに「おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）」を発足しました。大田区には22カ所の包括があり、1カ月に約1万件の相談に対応しています。相談対応の他にも介護予防や地域コーディネーターも任されている中で、包括の現状は1万件の相談に訪れた人たちへの対応だけで手一杯でした。しかし、その他にも地域には認知症高齢者などSOSの声を上げられない人たちがたくさんいます。職員が包括の中だけにいて相談に来る人たちだけを待っていたのでは、声を上げられない人たちに気付くことも出会うこともできません。入新井の包括のエリアには65歳以上の高齢者が約9千人いる中で、対応する職員はたったの7名。こっちの対応をすればあっちで問題が勃発する、モグラたたきのような業務の日々でした。

13年前のある時期に「もう、やってられない！」と、ちゃぶ台をひっくり返したんです。職員だけで何とかしようと考えるのではなく、地域で暮らす全ての人に現状を伝えていきながら一緒に考えてもらう、点（個）ではなく“面”で支える仕組みづくりをしていこうと思いきりました。

みま～もの肝！　2つのネットワークをつなぐ仕組み

包括職員は、通常、地域の人たちが医療や介護が必要になって初めて“相談”という形で出会いますが、そのときに出会っても手遅れであることが多いのが現実です。ですから、医療や介護が必要になる前から、専門職は自然な形で地域の中で高齢者に寄り添う必要があります。しかも、定期的に何かをするというのではなく、「気にかけてるよ」というさりげない仕方で自立を支援することが極めて重要だと思います。では、どのような仕方で行えば良いのか――みま～も立ち上げの際、「地域の人たちを見守り、支える仕組みとは何だろう」と一生懸命考えました。それで1つのネットワークをいくら強固に作っても機能しないことに気が付きました。

通常、“支援のネットワーク”の（**図1**）枠内の構成員はケアマネジャーなどの専門職です。サービス事業所、施設、公的機関、医療機関、警察や消防がこのネットワークに含まれます。この“支援のネットワーク”は支援が必要な人たちがこのネットワークにたどり着いて初めて機能する仕組みになっています。でも先ほども述べた通り、地域に暮らす高